『西南アジア研究』No. 92, 2021

タブリーズの王宮地区サーヒブアーバード
―― ポスト・モンゴル王朝の都市建設 ――

Development of the Royal District of Ṣāḥib-ābād in Tabrīz : Urban Planning in Post-Mongol Dynasties

後　藤　裕加子
Yukako GOTO

Abstract　Sāḥib-ābād, the royal district in the first Safavid capital, Tabrīz, has been considered the inspiration for subsequent royal districts in other capital cities, such as Sa'ādat-ābād in Qazwīn and Naqsh-i Jahān in Isfahān. Nevertheless, the origin and the process of Sāḥib-ābād's development have not been sufficiently studied, because of the lack of historical monuments from that age. In any case, both *maidān* (square) and *bāgh* (garden) are considered among the most important architectural elements of royal districts.

Sāḥib-ābād traces its history to the post-Mongol period. The Qara Quyunlu ruler, Jahān Shāh, decided to construct his new *daulat-khāna* (royal palace) inside a similarly named *bāgh*, instead of using the old *daulat-khāna* built by the Jalayrids in Sish-Gīlān district. Although the preceding nomadic rulers of the Iranian Plateau preferred to stay in the garden, they typically lived in tents and did not build a permanent residence. At some point, a *maidān* emerged adjacent to the east side of the royal garden and formed a "royal garden-square" structure. During the relatively stable (politically) reign of the Aq Quyunlu ruler, Uzun Ḥasan and his successor, Sulṭān Ya'qūb, a religious complex housing Uzun Ḥasan's tomb, Naṣrīya, was constructed on the north side of the *maidān* and a new *daulat-khāna*, Hasht-Bihist, was built in the royal garden, in the process establishing the "royal garden-square-religious institution" ensemble of Sāḥib-ābād. This ensemble combined two architectural styles, the "royal garden-square" and "religious institution-square" ensembles, both of which had precedents even prior to the Mongol invasion.

Since the Naṣrīya complex was supposedly an institution of *waqf*, it housed many commercial establishments such as caravanserais and baths, which were also built around the *maidān*. As a result, a *bāzār* (market) appeared on the east side of the *maidān*. The Sāḥib-ābād square functioned as a node to royal, religious, and commercial institutions, developed as a public space and a symbol of royal sovereignty. Sa'ādat-ābād in Qazwīn and Naqsh-i Jahān in Isfahān copied this "royal garden-square-religious institution" ensemble, which came into existence during the post-Mongol period, in parallel to the increasing inclination of the nomadic rulers for an urban lifestyle.

Keywords　Safavids (サファヴィー朝), Tabrīz (タブリーズ), daulat-khāna (王宮), maidān (広場), bāgh (庭園)

は　じ　め　に

サファヴィー朝（1501-1736）の最初の首都タブリーズは，イル・ハーン朝時代から遊牧系王朝の政治的拠点として発展を遂げた都市である。しかしその重要性にもかかわらず，近世以前の歴史研究の専論は少ない。第一の理由はまとまった叙述史料や文書史料が乏しいことにあり，第二の理由としては，サファヴィー朝とオスマン朝との間の度重なる戦禍やアゼルバイジャン地方で多発する地震よって町が被災し，検証を支える史跡に乏しいことが主な要因として挙げられる[1)]。第二の「首都」カズウィーンもまた，史料・史跡が少ないため研究の停滞が続いた[2)]。サファヴィー朝時代の都市研究の主要対象となってきたのは，第5代アッバース1世（在位1587-1629）の新都イスファハーンである。

アッバース1世が整備したイスファハーンの王宮地区は，内部に支配者が滞在する王宮をもつ庭園，宗教施設，市場などの諸施設がナクシェ・ジャハーン広場を囲む構造になっている一種の複合体とみなすことができる[3)]。この複合体の機能についての研究は，大きく2つの系統に分けることができる。ひとつは広場と王宮庭園との結びつきを重視する研究である。Alemiの一連の研究は，ナクシェ・ジャハーン広場（Maidān-i Naqsh-i Jahān）を王宮地区のファサードが表される場ととらえるとともに，アッバース1世時代にイスファハーンの王宮地区の構造が各地の都市建設を通じて普及したことを検証している。Babaie 2003は王宮地区の構造を，広場と王宮が隣接し，バーザールや宗教施設をもつ，「広場－王宮」構造（*maydān*-palace model）と定義し，これを王権表象の場ととらえた。カズウィーンの王宮地区サアーダトアーバード（Sa'ādat-ābād），さらに遡ってタブリーズの王宮地区サーヒブアーバード（Ṣāhib-ābād）も広場と王宮庭園を主要構成要素とする，イスファハーンの王宮地区と同様の構造をもつ複合体である。しかし，これらの研究は王宮地区における広場の重要性を強調し，この構造の起源やナクシェ・ジャハーン広場にいたるまでの継承について概観するが，個別に先駆の二王宮地区について考察することはなかった[4)]。

1）　通時的な研究はMinorskyが唯一である。KārangとMashkūrは総合的な地誌。近代以前の史跡を扱ったものにMelville 1981，Ökten がある。サファヴィー朝時代以外のタブリーズの都市研究には，イル・ハーン朝時代を扱ったものにJahn，Zakrzewski，カージャール時代を扱ったものにWerner 2000がある。サファヴィー朝時代の専論については脚註6を参照。

2）　サファヴィー朝時代のカズウィーンについての研究では，カズウィーンがいつ，いかなる理由で首都になったかが主に議論されてきた。王宮地区の構造について専門に扱った研究は，ながらくSzuppe 1996とWirthの2つのみであったが，近年になっていくつかの専論が続けて発表されている。研究史の詳細は後藤 2018を参照。

3）　本稿では，内部に王宮をもつ庭園のことを，便宜上，王宮庭園と呼ぶことにする。

4）　Alemiは，イスファハーン・モデルの最初期の例のひとつとしてタブリーズのサーヒブアーバードを挙げ［Alemi 1997, 73］，広場で開催されるポロ競技などの行事を，古代ペルシアにまで遡る王権表象のモデルと伝統に属し，アク・コユンル朝によって保持された儀礼パフォーマンスであるとした［Alemi 2007, 125］。Babaieは，タブリーズのサーヒブアーバード広場からの連続性に言及しつつも，タフマースブ1世によって建設されたカズウィーンのサアーダトアーバード↗

もうひとつの系統が，イスファハーンに至るまでのモンゴル時代以降のトルコ・モンゴル系遊牧王朝による都市建設の連続性を墓廟に見いだし，広場と庭園の発展を分けて考えた羽田の研究である。羽田 1987 は広場と庭園の結びつきをサファヴィー朝に一般的なものと指摘する一方で，君主の遊牧的な感性に注目し，アッバース 1 世の広場を中心とする町づくりを強調する従来説を否定するとともに，広場に対する庭園の優越性を説いた。羽田 1990 では，14，15 世紀の遊牧系君主が建設した都市には「牧地都市」および「墓廟都市」の特徴を兼ね備え，彼らが天幕を張って居住する場としての庭園が不可欠であることを明らかにするとともに，庭園と宗教・商業機能を持つ市街地を有機的に結ぶ結節点として広場の重要性を指摘した[5)]。「王や有力者が居住する」庭園と「宗教・商業機能の集中する」市街地が「メイダーンを結節点として有機的に結びついた」最初の例として先駆的意義を示唆されているのが，アク・コユンル朝時代（1378–1508）のタブリーズのナスリーヤ Naṣrīya である。ナスリーヤは，もともとアク・コユンル朝の支配者ウズン・ハサン（在位 1453–78）の墓廟をもつモスクやマドラサなどからなる宗教施設群で，サーヒブアーバードの王宮地区の広場の一辺を占め，王宮地区の発展に寄与した。本稿で考察するように，ポスト・モンゴル時代における庭園はモンゴル時代と異なり王や有力者が天幕を張って居住する場ではなく，内部に「王や有力者が居住する」王宮が建設されるようになった。そしてこの王宮を内部にもつ庭園は宗教施設の建設に先立って建設され，このそれぞれ別の建設事業が統合されたのがサーヒブアーバードであった。つまり王宮庭園が先行しているという点で，サーヒブアーバードは「墓廟都市」の分類には合致せず，また王宮をもつという点で羽田が想定する「牧地都市」にも必ずしも一致するものでもない。よって過度にその遊牧性を強調することはサーヒブアーバードの特徴を見誤ることになろう。羽田は「牧地都市」「墓廟都市」の延長線上にナスリーヤを位置づけたものの，広場を結節点とする「新都市」が形成されるようになった契機などについてさらに考察を進展させることはなかった。また，王宮の建設というサーヒブアーバードの新規性については指摘しなかった一方，サファヴィー朝期の新都市に建設者の墓がないことに，「墓廟都市」との大きな相違を指摘したが，最終的にサファヴィー朝の新都市にいたる遊牧王朝による都市建設の連続性と変化の問題は議論されることなく残された。イル・ハーン朝（1258–1335）の第 7 代ガザン（在位 1295–1304）以降，13，14 世紀のポスト・モンゴル王朝の「イスラームの王国イラン Islamic kingdom named Iran」概念の変遷を追う Zakrzewski は，羽田の説に依りながら royal city としてのタブリーズに

↘ 広場を庭園に天幕を張って生活をしていた遊牧王朝的な過去から決別したものとし，ナクシェ・ジャハーン広場の直接の先駆と考えた。広場のペルシア的な要素へ注目を向けるものの，その起源やナクシェ・ジャハーン広場にいたるまでの連続性については考慮されていない［Babaie 2003, 41–2 ; Babaie 2015, 179］。Aube の脚注 1 も参照。

5）「牧地都市」「墓廟都市」として例証されているのは，イル・ハーン朝時代のガザニーヤ，スルターニーヤ，およびナスリーヤの 3 つである。

支配位の継承を示す記念碑として建設された主要建築を挙げていくが，特定の建造物や施設の発展を通時的に検討するという視点はない。

Alemi および Babaie と羽田の議論は，いずれも王宮地区の中心部における広場の存在を前提としているが，どれも広場，王宮庭園，宗教施設という 3 つの建築要素を明確に認識し，その統合過程を包括的に検討することはなかった。Alemi や Babaie のように，広場と宮殿の複合構造をイスラーム以前のペルシアの伝統の継承として重視すると，王宮広場に面した宗教施設の建設や，そのサファヴィー朝への継承は軽視されることになろう。イル・ハーン朝がイスラーム化した後に建設されるようになった墓廟建築に遊牧系王朝の都市建設の連続性を見いだした羽田の説も，ポスト・モンゴル時代の王宮庭園の存在を軽視したため，サファヴィー朝の「首都」における都市建設と先駆王朝のそれとの連続性が不明確なものとしてしまった。羽田説に従えば，王宮庭園の建設はサファヴィー朝建国以前に限られた都市計画となり，そのサファヴィー朝への継承は軽視されよう。

先行研究がすでに認めているように，イスファハーンのナクシェ・ジャハーン広場の特徴である広場と王宮庭園の複合構造はアッバース 1 世の独創ではなく，イスファハーン遷都以前からの歴代の「首都」の王宮地区にすでに存在した構造が継承されたことに異論はないであろう。サファヴィー朝の最初の首都タブリーズの王宮地区サーヒブアーバードは，市の北部を東西に流れるミフラーン・ルードによってもともとの市の中心地から隔てられた川の北岸，現在はサーヒブ・アル・アムルと呼ばれる広場周辺に建設され，王朝交替を経ながら発展を続けた。その歴史をたどると，その主要な建築要素はサーヒブアーバード庭園，同じくサーヒブアーバードと呼ばれる広場，宗教施設ナスリーヤの 3 つであることが確認できる。庭園内部の宮殿については，サファヴィー朝時代に主宮殿として使われたハシュト・ビヒシュト宮殿が，アク・コユンル朝スルタン・ヤークーブ時代（在位 1478–90）に建設されたものであることがよく知られているが，広場と庭園の結びつきの契機やそれに遊牧政権が及ぼした影響について，アク・コユンル朝時代よりさらに遡って検討されることはなかった[6)]。上述したように，サーヒブアーバードは宗教施設が併設されているという点において，

6）Balilan Asl の一連の研究（Sattarzadeh & Balilan Asl 2013, Balilan Asl 2016, Balilan Asl 2019）は，1530 年代にオスマン朝のスレイマン 1 世のアゼルバイジャン遠征に同行して，諸都市を描いた Matrakçı の細密画と，ペルシア語年代記や欧米の旅行記に登場する建築物の記述を照らし合わせてサファヴィー朝時代のタブリーズの再現を試みている。しかし，Melville 1981 や Mashkūr という基本的な研究を参照していない，地震や戦禍による建築物の消失などの変化を考慮せずに叙述史料に登場する建築物を Maṭrāḳcī の地図に描かれた建築物と同定をはかろうとしている，また同定の際の根拠や手順を明らかにしていないなどの問題点が多く，その分析の利用には注意を要する。サファヴィー朝時代のサーヒブアーバードについては別項で論じる予定にしており，ここでは指摘するにとどめる。なお，サーヒブ・アル・アムル広場には同名のモスクが現存しており，これはタフマースブ 1 世が建設し，1635 年のオスマン軍の侵攻によって破壊され，以後再建を繰り替えしたものとされる［Melville 1981, 171 ; Aube, 59］。Aube はナスリーヤに建設されたウズン・ハサン・モスクの遺構に残るモザイク・タイルについての研究。

Alemi や Babaie が考えるようにペルシアの伝統的な庭園文化を単純に継承，もしくは復活させたものではなく，また王宮庭園が宗教施設より先に建設されたことから，羽田の提唱する「墓廟都市」にも単純には適合しない。ナクシェ・ジャハーン広場がアッバースの更なる都市建築のモデルとなったことを鑑みても［cf. Babaie 2015, 178］，サファヴィー朝時代にその支配領域に広まった，都市中心部の構造の原点としてのサーヒブアーバードの起源とその発展の詳細を，諸史料にもとづいて精査してみる意義は少なくないであろう。

本稿は，ペルシア語の年代記およびヨーロッパ人を主とする旅行記の記述を主な史料とし，写本絵画や詩も補完史料として用いながら，サファヴィー朝の「首都」の祖型としてのサーヒブアーバードの総合的な考察を試みる。まず，第 2 代タフマースブ時代（在位 1524–1576）時代のサーヒブアーバードをひとつの完成形として，その構造や王宮地区と広場の役割を確認した後に，その起源と発展の歴史を考察する。最後に広場と庭園および宗教施設からなる王宮地区の構造の原点について考えていきたい。

Ⅰ　タフマースブ時代のサーヒブアーバード

サファヴィー朝は，初代イスマーイール 1 世（在位 1501–24）がアク・コユンル朝の首都タブリーズに入城するとともに成立し，王宮地区のサーヒブアーバードもこのときにアク・コユンル朝から接収されている。サーヒブアーバードの起源と発展の歴史を検討していく前に，まずは叙述史料から第 2 代タフマースブ 1 世時代のサーヒブアーバードの構造を確認しておく。

サーヒブアーバードについての記述は断片的なものがほとんどで，広場周辺に建てられた施設の位置関係を明らかする史料は少ない。最も詳細な情報を提供する基幹史料となるのが 1540 年にタフマースブの宮廷を訪れたイタリア人使節メンブレ Membré の旅行記である。

> 「彼らは市内のシャー・タフマースブの邸宅を建て直し中だった。それは一部は石，一部は土の壁に囲まれた美しい庭園のなかにあり，ひとつは東，もうひとつは南東に 2 つの扉があった。東側には彼らがメイダーンと呼ぶ広場があり，こぎれいで平らで広々としていた。その広場の真中には高い木製の柱が立っていて，頂きに金のりんごが乗っていた。北側には 2 つの美しいモスクが隣同士に建っており，メイダーンに面した東側にシャーはもうひとつ新しい，もっとも美しいモスクを建設していた。通りに面した側には彼らがチャーイと呼ぶ小川が流れている。南東に面した別の側には，壁があり，壁の中に庭園がある。別の側，先に述べたメイダーンに面した東から入って王の宮殿のそばを行くと，彼の兄弟バフラーム・ミールザーの邸宅が建っている。南東に面した別の側の門を通って 19 歩ほど行くと橋があり，道は南東に向かう。……」［Membré, 29］

メンブレによれば，タフマースブが建て直し中の宮殿[7]が壁に囲まれた庭園の中にあること，その庭園が東で広場に面し，カズウィーン，イスファハーンに継承される「広場ー宮殿」構造が確認できる[8]。庭園の北側にはすでに2つのモスクが建っていて，広場に面した東にもう1つ新しいモスクが建設中であった。

広場を中心に見た場合，宮殿は西辺に位置し，広場の他の3辺にも各種の公共施設が建てられていた。これらの建物と広場との位置関係を確認できる記述は少ないが，メンブレがタブリーズ滞在中に宿泊した家は「広場に面し，ナッカーラ[9]が響くところ」［Membré, 33］にあり，「広場を過ぎてベグム市場と呼ばれる市場を東にまっすぐ進み，先の市場の終わりまで直進すると2つの鐘楼のようなミナレットを持つモスク[10]に至る」［Membré, 50］とあることから，東辺にはカイサーリーヤ[11]と呼ばれる市場が備わっていたことが推測できる。また，「東に浴場，南東にもうひとつ，隊商宿が北にひとつ，東にひとつ，西にふたつ」［Membré, 50］ともあるが，隊商宿が一軒建てられていた北辺は，「サーヒブアーバード広場の北側にある，いまは亡きハサン・パーディシャーのマスジド」［*TAA*, 298］があった場所でもある。ハサン・パーディシャーとは，サーヒブアーバードが王宮地区として発展するきっかけをつくったアク・コユンル朝最盛期の支配者ウズン・ハサンのことで，彼の名を冠する宗教施設ナスリーヤが北辺にあり，これを経済的に支える商業施設群も併設していたことを示している。

オスマン朝との国境に近いタブリーズはオスマン軍の度重なる侵略や占領によって破壊され，サーヒブアーバードもサファヴィー朝時代を通じて大きく変容する。1550年代のカズウィーンへの遷都以降のタブリーズの変容については別稿で論じることにするが，メンブレが訪問した1540年の段階で，サーヒブアーバードがサファヴィー朝の王宮地区の広場の有する3つの機能，すなわち軍事，使節の歓迎などの国家行事，商業活動［Szuppe 1996, 172–4；後藤 2018, 19–20, 23］をすでに備えていたことが確認できる。例えばメンブレは広場で開催された犠牲祭やノウルーズ（新年）の祝祭と，その際に行われたポロ競技を見学している[12]［Membré, 32–3, 35–6］。ムガル朝の第2代フマーユーン（在位 1530–38, 1555–6）

7）この宮殿は，アク・コユンル朝時代に建設されたハシュト・ビヒシュト宮殿である。第2章参照。

8）庭園が東で広場と接していたことについては，1507年にイスマーイール1世を訪問したロマノ Romero の記述からも確認できる［Romano, 176］。ロマノの記述については第2章で考察する。

9）ナッカーラ naqqāra は元来，公的行事などの際に演奏する軍楽隊を意味する用語で，サファヴィー朝時代のイスファハーンではカイサーリーヤのバルコニーの上で演奏が行われた。［Lambton 1993, 927–8］

10）このモスクは現在，市の中心部の南東部にあり，ブルー・モスクとして知られる，カラ・コユンユ朝の支配者ジャハーン・シャーが建築したモスクのことを指すと考えられている。［Membré, 51］

11）広くイスラーム世界で用いられる，都市内の大規模商業施設を指す言葉。［羽田 1996, 213］

12）ポロ競技は騎馬遊牧民族にとっては軍事訓練を兼ねた娯楽であるので，国家行事であるととも↗

がすでにカズウィーンに遷都していたタフマースブのもとに亡命したとき，彼は更に足を伸ばしてタブリーズを訪問している。

「タブリーズの住民は世界のシャー（＝タフマースブ）の命令に従って町を飾りつけ，カイサーリーヤとバーザールを新婚夫婦が喜びの寝室を飾るがごとく飾り立て，その壮麗なる天の皇帝を完全なる装飾によって出迎え，品をもってお仕えした。その高貴な生まれのホスロー（＝ムガル朝皇帝フマーユーン）にサーヒブアーバード広場で，タブリーズ人たちの定番のポロ競技や弓術競技や大道芸（aqsām-bāzī-hā wa shīrīn-kārī-hā）をご覧にいれ，貴き御心をお喜ばしになった。」［*TAA*, 100］

時代をさかのぼってイスマーイール 1 世が 2 度目のシールワーン遠征から帰還した 1507 年には，

「全ての店舗は祝祭と勝利のために飾りつけられた。彼はメイダーンにやって来て君侯たちと弓術を楽しみ，君侯たちは彼から贈物をもらった。偉大なスルタン・イスマエルがメイダーンにいる時には，その栄誉を讃えるために踊りや音楽や歌が催された。」［Romano, 206］

なお，Szuppe の分類では国家行事に入れられる罪人の公開処刑の記述も，叙述史料から確認できる［cf. Membré, 35-6 ; *Takmilat*, 85, 89, 90］。

こうしてサファヴィー朝時代の初期には，サーヒブアーバードの王宮地区は広場に面して王宮庭園，複数の宗教施設，商業施設を供え，軍事，国家行事，商業活動が営まれる公空間として機能していたのである。

Ⅱ　サーヒブアーバードの建設と発展

1. カラ・コユンル朝ジャハーン・シャーのダウラトハーナ建設

サーヒブアーバードの発展にはアク・コユンル朝の支配者ウズン・ハサンが深く関わっていたことは，すでに先行研究も指摘しているが，その歴史をさらに遡って詳しく考察する研究はなかった[13)]。ここからはサーヒブアーバードの始まりと発展の歴史をみていく。

↘　に軍事に分類される。

13）　Melville 1981, 170 ; Blair 2010, 49 ; Blair 2014, 351 ; Zakrzewski, 64. Ökten は王権の表象としてカラ・コユンル朝とアク・コユンル朝の宗教施設，具体的にはムザッファリーヤとナスリーヤを比較するが，世俗建築については簡単に概略を述べるに留まり，後述するジャラーイル朝シャイフ・ハサンのダウラトハーナについても，これが直接アク・コユンル朝によって継承されたとす↗

ウズン・ハサンのもとで書かれたアク・コユンル朝の歴史書『ディヤールバクルの書 *Kitāb-i Diyārbakrīya*』には，1467 年，ウズン・ハサンがカラ・コユンル朝（ca. 1353-1469）のジャハーン・シャー（在位 1439-67）に勝利してタブリーズに入城した後の記述に，「ジャハーン・シャーのダウラトハーナ[14]となっていたサーヒブアーバードの邸宅（khāna-yi Ṣāḥib-ābād ki daulat-khāna-yi Jahān-shāhī）」［*DB*, II, 437］との記述がある。これが管見の限り同時代史料にサーヒブアーバードの名前が登場する最初である。同じく『ディヤールバクルの書』には，「亡き皇帝建設のサーヒブアーバードの邸宅の広場（maidān-i khāna-yi Ṣāḥib-ābād ki banā-yi pādshāh-i marḥūn）」［*DB*, II, 523］とあり，ジャハーン・シャーのダウラトハーナが広場に隣接していたことが明らかとなる。サファヴィー朝時代の 16 世紀に書かれたタブリーズ地誌『天国の庭園 *Rauḍāt al-jinān*』によれば，「シシュ・ギーラーン地区に古いダウラトハーナ（daulat-khāna-yi kuhna）として知られる場所」があり，「言い伝えによれば皇帝ジャハーン・シャー以前のスルタンたちがそこに住まっていたが，ジャハーン・シャーはここ（＝サーヒブアーバード）に移した。ここは国（＝イル・ハーン朝）の宰相（ṣāḥib-i dīwān）の亡きシャムス・アッディーン・ムハンマド・ジュワイニーにちなんでサーヒブアーバード庭園と名づけられた庭園であった」［*Rauḍāt*, I, 470. cf. Kārang, 160 ; Mashkūr, 743 ; Zakrzewski, 59, 63］という[15]。

イル・ハーン朝時代の歴史書を含めて『天国の庭園』以外の歴史書には同様の記述がないので，サーヒブアーバードの起源がイル・ハーン朝時代に遡るというこの記述の信憑性を裏付けるものはない[16]。しかし，サーヒブアーバードが建設された土地は，ミフラーン・ルード川によってもともとのタブリーズの中心地からは隔てられた場所にあった。イル・ハーン朝時代の地理書『心魂の歓喜 *Nuzhat al-qulūb*』はタブリーズに多くの庭園があったことや，ミフラーン・ルード川がそれらの庭園に水を供給していたことを記録している［*Nuzhat*, 77］。先駆の支配者たちの「古いダウラトハーナ」があったとされるシシュ・ギーラーン地区もミフラーン・ルード川からほど遠くない北岸にあった。イル・ハーン朝時代以前から遊牧系諸王朝の支配者が都市郊外に庭園を造園する傾向があったことから考えても［cf.

↘ る［Ökten, 374］。またサーヒブアーバードの発展を総合的に考察するという視点はない。

14）ダウラトハーナは，サファヴィー朝時代の歴史書にはシャーが滞在し，政務を行う場の意味で使われる。シャーの定住傾向が強まるタフマースブ 1 世時代からアッバース 1 世時代にかけては，基本的に王宮地区内の王宮を指す［後藤 2018, 3-4］。なお，タフマースブ 1 世時代の年代記のひとつ『最善の歴史 *Aḥsan al-tawārīkh*』には，ジャハーン・シャーのダウラトハーナは，サーヒブアーバードの邸宅（ḥawālī-i Ṣāḥib-ābād）と記されている［*AT*, 676］。

15）なお，古いダウラトハーナは，後にウズン・ハサンによって Bābā ʻAbd al-Raḥman なる人物に与えられた。ʻAbd al-Raḥman は死後，ここに埋葬され，サファヴィー朝時代には廟として記されている［*Rauḍāt*, I, 470］。

16）イル・ハーン朝時代の建築物について研究した Wilber 1955 のリストにも挙げられていない［Wilber 1955, 100-4］。

Golombek 2000, 299 ; 羽田 1990, 8-9]，ジャハーン・シャーがそのようなタブリーズ北部の庭園のひとつに自身のダウラトハーナをあらたに建設したこと，またある段階で庭園と広場が隣接するようになっていたことは間違いなさそうである。それでは，『天国の庭園』が伝える「古いダウラトハーナ」が意味するものは何かという問題が残るが，これについては後述するとし，次にアク・コユンル朝時代のダウラトハーナの発展の歴史をみていきたい。

2. アク・コユンル朝時代のハシュト・ビヒシュト宮建設

ヴェネツィアから派遣された使節バルバロ Barbaro は，1474 年にサーヒブアーバード庭園内の王宮でウズン・ハサンに謁見した。この王宮はジャハーン・シャーのダウラトハーナで，そのままウズン・ハサンの王宮として受け継がれたものと推察される。

> 「私（＝バルバロ）が王（＝ウズン・ハサン）と接触をもった場所はこのようなものであった。……最初の門の近くに別の門があり，職杖を手にした門衛が立っていた。その門から入ると，沢山のきのこと泥塀をもつ草原のような緑の庭園で，その右手に歩道があった。30 歩ほど進むとロッジがあった。……」[Barbaro, 52]

アク・コユンル朝の年代記『アミーン史 *Tārīkh-i ʻālam-ārā-yi Amīnī*』は，ウズン・ハサンの息子スルタン・ヤアクーブがサーヒブアーバードの庭園内に 888/1483-4 年に着工したハシュト・ビヒシュト宮（ʻimārat-i Hasht-bihisht）[Bidlīsī, II, 126] が，891/1486 年に完成したことを記している。

> 「この幸運な年（891/1486 年）のムハッラム月 1 日，喜びをかき立てる従者（＝ヤアクーブ）は統治の都タブリーズに滞在した。……この年サーヒブアーバード庭園内（bāgh-i Ṣāḥib-ābād）に建設中だったハシュト・ビヒシュト宮（Qasr-i Hasht-bihisht）の建物が完成した。この建物はトルコ石色の玉座のように庭園の中心にそびえ，その貴き頂は二聖都の石をハワルナクとピラミッドの方に投げつけた。その建造は八角形の構造で，すべての辺の外側にあるテラス（ṣuffa）とまるで恋人の眉のように魅力的なアーチが完璧を愛する人を惹きつけた。」[*Amīnī*, 226][17]

ヤアクーブがサーヒブアーバード庭園内に建設したハシュト・ビヒシュト宮（八天宮）は 8 角形のパビリオンである。ハシュト・ビヒシュトはイスラームの宇宙観をあらわす概念で，同名の王宮は 14 世紀からイラン高原や中央アジアの諸王朝のもとで建設されるようになる [Bernardini, 49-51]。ヤアクーブのハシュト・ビヒシュト宮の豪華さについては 1507 年に

17）他に Ghistele, 336-7 ; *KhT*, 771. Cf. *Rauḍāt*, I, 598-600 ; Woods, 137, 272-3.

タブリーズを訪れたイタリア人商人ロマノ Romano やメンブレが詳細に記録している[18]。イスマーイール 1 世がアク・コユンル朝の勢力を排除し，タブリーズに入城したときにも，まずハシュト・ビヒシュト宮に居を定めている[19]。

バルバロは王宮の中でウズン・ハサンに謁見しているので，外交使節の謁見という王宮の機能が，アク・コユンル朝時代にはすでに備わっていたことも確認できる。

「（ウズン・ハサンの息子ハリールは）このような状況のなか，好機をとらえて統治の座に就く決心をし，ある不運な日，供の者たちや軍隊に囲まれてサーヒブアーバード広場にやって来て，広場を見渡す王の景観（dar manẓir-i pādshāhī ki bar maidān mushrif-st）のなかで玉座に座した。」［*Amīnī,* 106］

ハリールはヤアクーブの兄弟で，ウズン・ハサンの死後，ヤアクーブに先んじてタブリーズで即位したが，まもなく殺害された。この記述は簡素なものの，広場に面して王宮庭園に楼閣が建てられており，ハリールは自らの即位を周知するために建物の上で何らかの即位の儀式を挙行したことをうかがわせる。サファヴィー朝時代のカズウィーンやイスファハーンの王宮地区では，広場に面してアリ・カプ門という高閣が建設され，シャーがそのバルコニーから広場で行われる行事を眺めた。ハリールの即位式の記述は，すでにアク・コユンル朝時代のサーヒブアーバードに，同様の機能をもつ高閣風の建築物が広場に面して建てられていたということを明らかにする。サファヴィー朝ではタフマースブのカズウィーン遷都後，王宮が即位を含む公的行事の会場として使用されるようになり，王権表象の場としての重要性を増していくが[20]，アク・コユンル朝時代にすでにその萌芽が見られたということであろう。先人よりも権力誇示の強い嗜好を持ち，そのような用途のために新たに壮麗な王宮を建築しようとしたのがスルタン・ヤアクーブだった［cf. Woods, 137］。

サファヴィー朝建国まもない 1507 年にタブリーズを訪れたロマノは，次のような記述を残している。

「私は偉大なスルタン・アサンベイ（＝ウズン・ハサン）が建設した美しい宮殿を省くわけにはいかない。……この宮殿は，川によって北で隔てられただけの，町のすぐそ

18）ロマノやメンブレを主な史料としてハシュト・ビヒシュト宮殿の構造を考察した研究として，Babaie 2003 と Babaie 2015 を参照。

19）ただし，「（出迎えを受けた翌日，イスマーイール 1 世は）タブリーズ市外から神のご加護を受けた魅力的な町の中へ入られ，芳香の清浄さと果樹園の優雅さによって天国の妬みとなったハシュト・ビヒシュト庭園に居を定められた」［*Futūḥāt,* 173］とあるので，その日のうちに宮殿の中に入ったのかどうかは不明。

20）後藤 2004；後藤 2005；後藤 2018 など筆者の一連の研究を参照。

ばの大きく美しい庭園の中央に建てられた。同じ環境に豊かで有用な病院を付設するモスクがある。宮殿はペルシア語でアスティビスティで，我々の言葉で８つの部分を意味する。なぜならそれは８区画からなっているからである。……これがアサンベイが謁見を行う宮殿である。宮殿からすこしだけ離れたところに１階立てのハレムがあり，千名もの女性が好きなように様々な部屋に住んでいる。……（庭園には）３つの入口があり，ひとつは南，ひとつは北，３つ目は東にある。南の入口は煉瓦でアーチをかけられているが大きいものではなく，庭園を通って宮殿まではわずかの距離である。門を入って15歩ほど左手にギャラリーがある。……北側には煉瓦で覆われ，大理石の座部を周りにもつ修道院のような建物に入る。……東側の別の扉は巨大なメイダーンまたはピアッツアに面していて，庭園に通じている。扉は煉瓦づくりでアーチ状，３ヤードの高さ，２ヤード幅で，装飾はないが簡素に白く漆喰を塗られ，入ると美しい大きな泉がある。その上に大きな沢山の部屋と屋根付きのホールをもつ建物があり，庭園を見下ろす。広場に面した側にはアーチ状のギャラリーがあり，その白さは私がこれまで見た何よりも勝っていると考える。広場で祝祭が催される際にはいつでも，アサンベイは多くの君侯たちとこの建物に引きこもったし，大使が来たときには彼らはしばしばここに連れてこられた。なぜなら沢山の個室があったからである。この扉はほかのよりも宮殿から遠かったが，私がすでに言及したモスクと病院をともなう広場の壮麗な眺めが得られた。スルタン・アサンベイによって建てられたこのモスクは，内部に沢山の部屋をもち，漆喰と金と青で装飾されていた。……」［Romano, 173-4, 176-7］

ハシュト・ビヒシュト宮がウズン・ハサンによる建設という誤解はあるが，王宮地区の諸施設については，ここまでで確認した情報を裏付けてくれる。すなわち八角形のパビリオン型の豪華なハシュト・ビヒシュト宮があらたに建設され，これが謁見に使われたこと，庭園が広場の西辺に位置し，広場に面して高閣が建設されていたことである。この高閣が新築されたものかどうかまでは判断がつかないが，おそらくペルシアの伝統的なイーワーン形式の高い建物であったことが推察される[21)]。そのバルコニーから支配者は外国使節とともに広場で祝祭を眺めることできた。

カラ・コユンル朝ジャハーン・シャーによって建設されたサーヒブアーバードの王宮庭園はアク・コユンル朝によって継承され，さらに施設や機能面が拡張された。その初期段階からダウラトハーナは支配者の居住施設としてのみならず，使節の謁見や即位の場として機能し，王宮庭園と接する広場を含めて，サーヒブアーバードはいわゆる「広場－王宮」構造を有する公空間を構成していた。支配者の滞在地として庭園が重視される点はイル・ハーン朝時代からの連続性が認められるとはいえ，都市における居住施設として王宮を建設し，広場

21）　カズウィーンの王宮地区サーヒブアーバードの現存するアリ・カプ門もイーワーン形式である。

や宗教施設などを含めて都市型の建造物を支配の装置として取り入れたところに，ポスト・モンゴル時代の支配者の大きな意識変化をみることができよう。

3. 宗教施設群ナスリーヤの建設と王宮地区の完成

公的空間としての広場の機能の充実に貢献し，またその壮麗さを更に際立たせる舞台装置となっていたのは，ウズン・ハサンによって建てられたというモスクと病院であった。

ロマノによってその壮麗さを讃えられたモスクは，広場の北辺に建設された宗教施設群ナスリーヤの主施設に間違いない。ナスリーヤの建設はハシュト・ビヒシュト宮の建設に先立つもので，882/1478 年にウズン・ハサンが亡くなったとき，その遺体がナスリーヤの小庭園に埋葬されたという［*Lubb*, 251 ; *Jawāhir*, 80 ; *AT*, II, 805 ; *Rauḍāt*, I, 523-4］。タフマースブ時代の年代記『歴史の宝石 *Jawāhir al-akhbār*』によれば，「いと貴き建物であるナスリーヤ（Naṣrīya ki ʻimārat-i ʻālī ast）」はウズン・ハサン自身によって建てられたという。『天国の庭園』によれば，生前ウズン・ハサンがあるデルウィーシュに，自身の墓の上にモスクとザーウィヤの建設を命じ，その実現を受け入れた息子のヤアクーブが，882/1477-8 年から 7 年と 2,000 トマンの予算でモスクとマドラサを完成させた［*Rauḍat*, I, 90-1, 524 ; Woods, 137, 272（note, 52）; Mashkūr, 747-8 ; Melville 1981, 171 ; Kārang, 327-341 ; Aube, 34］。どちらも後世の史料なのでやや信憑性は低いが，ウズン・ハサンの生前に，すでに何らかの宗教施設の建設が開始されていたものと推察される。ロマノの記述にある病院やメンブレが記している隊商宿がいつ頃建設されたのかは不明だが，ウズン・ハサンの廟が附属するモスクやザーウィヤ，マドラサ，病院が広場の北辺に並び，東辺には隊商宿や市場も近いことから，これらは廟を核にワクフ制度によって宗教施設と経済施設が隣接する宗教複合施設として順次整備されたと判断するのが自然である。1474 年にウズン・ハサンの宮廷を訪れたバルバロは，ウズン・ハサンに勧められて「広場，すなわち市場（Maidan, that is, to witt, to the market place）」の賑わいを見物にいっている［Barbaro, 53］。このことはナスリーヤがウズン・ハサンの生前から経済施設を併せ持つ宗教複合施設として整備されたたけでなく，広場が公空間として発展していたことを示唆しよう。なお，タフマースブ時代には，あるサイイドが「サーヒブアーバード広場にある，ナスリーヤとして知られるハサン・パーディシャーのいと貴き廟の監督であった」［*TAA*, 153］という。アク・コユンル朝はサファヴィー朝の仇敵ではあったが，母方で祖先の家系でもあり[22]，その英主ウズン・ハサンの廟は手厚く管理されたのであろう。

では，なぜナスリーヤはすでに世俗建築である王宮がすでに建てられていた広場に面して建設されたのであろうか。ガザニーヤやラシード・アッディーンのラシード区に代表される

22）イスマーイール 1 世の祖父ジュナイドはウズン・ハサンの妹を，父ハイダルはウズン・ハサンの娘を妻とした。

ように，イル・ハーン朝のイスラーム化以降，タブリーズでは支配者や有力者による宗教施設の建設がさかんになる[23]。イル・ハーン朝の支配者は，羽田が「墓廟都市」「牧地都市」と分類したような巨大な宗教施設を都市外部に建設したが，定住系の有力者層はタブリーズ周縁部に宗教施設を建設し，それらのなかにはすでに広場に面して建設されたものがあった。

ラシード・アッディーンの政敵アリー・シャーは1310年代から20年代の間に，モスクを核としてマドラサと修道場を備える宗教施設を建設した[24]。1320年代から30年代に金曜モスクとなっていたモスクは，現在は城砦（アルグ）として知られるイル・ハーン朝時代の数少ない史跡で，その巨大さはアリー・シャーの権力の巨大さをうかがわせる。724/1324-5年にはモスクには墓（maqbara）があり，ここにアリー・シャーが葬られた［*ZJT*, 161-2. Cf. *Maṭla'*, I-1, 90 ; *Rauḍāt*, I, 496-7, Bidlīsī, II, 29 ; イブン・バットゥータ，III, 45］。14世紀後半に書かれたティムール朝（1370-1507）時代の年代記『ファシーフの摘要 *Mujmal-i Faṣīḥī*』は，アリー・シャーの埋葬時の記述として金曜モスクが古広場の地区（maḥalla-i maidān-i kuhna）にあったと伝え（*Faṣīḥ*, III, 36），モスクが広場に近接する場所に建てられていたことをうかがわせる。

ポスト・モンゴル時代のチョパン朝時代（1335-1357）になると，遊牧系の支配者層もタブリーズ周縁部に宗教施設を建設するようになる。742/1341-2年もしくは翌年に小ハサン（1343没）はモスク，マドラサ，修道場などからなる宗教施設群をタブリーズ広場（史料によっては古広場）に建設している（'imārat-i bas 'ālī as masjid wa madrasa wa khānqāh wa ghair-i ān dar maidān-i Tabrīz buniyād nihād）［*ZJT*, 213. Cf. *Uwais*, 228 ; *Faṣīḥ*, III, 60, 62 ; *Maṭla'*, I-1, 205 ; *Rauḍat*, I, 44-5. Cf. *Rauḍat*, I, 567 ; Mashkur, 579 ; Zakrzewski, 58］[25]。この宗教複合施設は小ハサンのラカブに由来してアラーニーヤ 'Alānīya と名づけられ，サング・

23）ラシード区については，Blair 2016を参照。支配者層によって建設されたタブリーズの建築物の概要についてはMelville 1981を参照。Zakrzewski 2000も支配者層がタブリーズに建設した宗教施設について随所で言及している。本稿で扱っていないポスト・モンゴル時代の宗教施設で代表的なものは，ディマシュキーヤ Dimashqīya とムザッファリーヤ Muẓaffarīya。有力アミールのアミール・チョパンの娘でイル・ハーン朝第9代アブー・サイード（在位1316-1335）の妃バグダード・ハトゥンは自身の兄弟ディマシュク・ホージャ（727/1327年没）のためにディマシュキーヤを建設した。母方でアミール・チョパンとつながるジャラーイル朝の一族が同廟に埋葬されている［*ZJT*, 245-6 ; *Maṭla'*, I-2, 472 ; *Faṣīḥ*, III, 108 ; *HS*, III, 242 ; *RS*, V, 578 ; *Rauḍāt*, II, 6-8. Cf. Kārang, 398, 628 ; Mashkūr, 591-3 ; Wing, 80 ; Zakrzewski, 61］。カラ・コユンル朝のジャハーン・シャーが建設したムザッファリーヤには専論として Werner 2003がある。ブルー・モスクとして知られるモスクが現存する［cf. Werner 2003, 95, 100, 104 ; Golombek&Wilber, 408 ; Kārang, 281-319 ; Zakrzewski, 62］。また Werner にはジャラーイル朝の一族がタブリーズにワクフ設定した別の宗教施設を考察した Werner 2013もある。アク・コユンル朝時代のものでは他にウズン・ハサンの息子 Maqṣūd の名を冠した Maqṣūdīya が史料から確認できる［*Rauḍāt*, I, 477, 527. Cf. *Rauḍāt*, II, 640（脚註1）; Melville 1981, 160, 170-1］。

24）詳細については Mashkūr, 501-2 ; Kārang, 240-1 ; Wilber 1955, 146-9を参照。

25）タブリーズ広場はすでにガザン時代に存在し，ここで処刑が行われたことが記録されている［*JT*, III, 324 ; 羽田 1990, 28］。

シヤー地区（maḥalla-i Sang-siyāh）のウスタード・シャーギルド（ʻimārat-i Ustād Shāgird）と同定されている。同名のウスタード・シャーギルド・モスクは現在もバーザールの南，アルグの近隣に現存しており，アリー・シャー・モスクもアラーニーヤも当時はこの近辺にあった広場の周辺が意図的に敷地として選ばれたように思われる。宗教複合施設ではないが，758/1356-7 年もしくは 759/1357 年にキプチャク・ハーン国第 11 代ジャーニー・ベク（在位 1342-57）がタブリーズに侵攻したときに，彼は殺害したチョパン朝の支配者マリク・アシュラフの頭を広場に面したマラーギヤーン・モスク（Masjid-i Marāghiyān）という名のモスクの扉にさらしている［*ZTG*, 63 ; *ZJT*, 235 ; *Maṭlaʻ*, I-1, 315 ; *Lubb*, 182 ; Bidlīsī, II, 52. cf. Wing, 104］。これらの宗教施設が広場に面して建設された理由については次章で考察するが，すでにあった「広場－宗教施設」構造の建造例を目にしているウズン・ハサンにとって，自身の廟を備える宗教施設の建設場所として，公共性が高く，視界もひらける広場を選ぶのは自然な流れであったろう。

広場に面して王宮庭園と宗教施設が同一空間を共有する「王宮－広場－宗教施設」構造が成立したことで，公空間としてのサーヒブアーバードは完成をみた[26]。サーヒブアーバードの始まりと発展の歴史を総括すると，サーヒブアーバードの歴史はカラ・コユンル朝のジャハーン・シャー時代に広場に面する王宮庭園が建設されたことに始まる。アク・コユンル朝時代のウズン・ハサンの統治時代末期かスルタン・ヤアクーブの時代に入って広場周辺は宗教施設群ナスリーヤ，ハシュト・ビヒシュト宮が建設されたことで王権の壮麗さを演出する空間としての基盤が整った。バルバロの記述が示唆するように，宗教施設や病院などの公共施設を維持するためのワクフ財としての商業施設が順次周辺に建設されていったはずで，羽田の指摘するような，広場を結節点として王宮庭園，宗教施設，商業機能が有機的に結びつく王宮広場がタブリーズに現出したのである。

ウズン・ハサンはティムール朝などの侵攻を撃退してアク・コユンル朝の最盛期を創出し，その後継者のスルタン・ヤアクーブ時代も大きな戦禍はなく，ポスト・モンゴル時代としては数少ない政治的にも経済的にも安定した時代が続いた。特にスルタン・ヤアクーブは外交使節の饗応の派手さが伝えられており，これに相応しい，より新しく豪華な施設への欲求がハシュト・ビヒシュト宮の建設につながったのであろう［cf. Quiring-Zoche, 166 ; Woods, 137］。王宮庭園と共有する広場にナスリーヤを建設した経緯は不明である。ただ，第 3 章で後述するように宗教施設を広場に面して建設することそのものは，モンゴル時代以前からみられた傾向であった。王宮広場と近接する広場を墓付きの宗教施設の敷地として選択した理

26）Babaie が「広場－王宮」構造で説明するサファヴィー朝の王宮地区のことを，本稿ではポスト・モンゴル時代のタブリーズの王宮地区における 3 要素の史料上の出現順に合わせ，仮に「王宮－広場－宗教施設」構造と称することにする。広場を中間におくのは，広場が 3 要素の結節点としての機能をもつことにも起因する。

由には，王権の象徴である王宮に近くに安らぎの場を設けたい，もしくは王権を宗教権威によって高めたいなどの心理的な理由が影響したと思われる。いずれにしても「王宮－広場－宗教施設」構造の王宮地区の現出によって王宮広場の壮麗さが増し，公空間としての整備が進んだことは事実で，サーヒブアーバードの発展は，アク・コユンル朝の支配の安定と不可分の関係にあったのである。

タブリーズのサーヒブアーバードのみならず，サファヴィー朝の首都の王宮地区として建設されたカズウィーンのサアーダトアーバード，イスファハーンのナクシェ・ジャハーンのいずれも，まずダウラトハーナを内部にもつ王宮庭園の造営が着手され，後に宗教建築が建設されている。広場に王宮庭園と宗教施設が揃う，これらポスト・モンゴル時代の「王宮－広場－宗教施設」構造をもつ王宮地区の建設は，羽田の唱える支配者の墓を核として発展した墓廟都市とは別の流れ，むしろ「首都」における王宮庭園建設の流れを主流として理解することがより適切と思われる。

サファヴィー朝の初代イスマーイール 1 世の都市に対する姿勢は不明で，タブリーズでの建設活動も知られていない。しかし 912/1506-7 年から 915/1509-10 年の間に冬営地となったホイでは荒廃していた町が再建され，壁に囲まれ，広大で壮麗な庭園やハレムをあわせ持つ大きなダウラトハーナが建設されたことが伝えられている［Romano, 165］。サファヴィー朝成立の頃までには，支配者が滞在する都市において政治的拠点ともなるダウラトハーナは不可欠な施設という認識が自明となっていたのであろう。サファヴィー朝は都市建設に際してアク・コユンル朝時代までに確立した王宮地区とその機能をさらに受け継いだといえよう。

Ⅲ　「王宮－広場－宗教施設」構造成立の経緯

1. ジャラーイル朝時代のダウラトハーナ

サーヒブアーバードの「王宮－広場－宗教施設」構造は，サーヒブアーバード建設以前に個別に存在した「王宮－広場」構造と「広場－宗教施設」構造の建築の流れが合流したことで実現した。この章では，その流れを遡って追っていく。

ジャハーン・シャー以前の支配者の古いダウラトハーナがあったとされるシシュ・ギーラーン地区は，サーヒブアーバードと同様にミフラーン・ルードの北側，サーヒブアーバードの東側に位置する地区である。ジャラーイル朝（1336-1411）の支配者スルタン・ウワイス（在位 1356-1374）のダウラトハーナについては，中央アジアにティムール（在位 1370-1405）を訪れる途中の 1403 年にタブリーズに寄ったスペイン使節クラヴィホの記述から確認できる。

「町じゅうにりっぱな道路やうまく配置された広場があり，そのまわりにはいずれも表入口を広場の方に向けた多きな建造物や家屋が沢山ある。……これらのりっぱな建物はみな，むかし，このタブリーズに名だたる富豪が居て，彼らが隣人どうし，最もりっぱなのを建てようと競争しあって，費用に惜しみなく建てたものだとのことだった。それらの建物のうち格別なものを一つ見に行ったが，それはまさに大宮殿で，周囲に壁をめぐらし，まことに美しくみごとで，なかには，部屋などが二万もあった。この大宮殿は〔まえにも話した〕スルタン・オベイス〔・ジャライル〕という君主が，その統治の初年，エジプトのスルタンから貢納として送られて来た財宝を使って建てたものだと聞いた。それは，いま，デウレト・ハーナとよばれているが，「幸運の家」とほん訳できよう。この巨大な宮殿は，大部分そのまま残っているが，……その多くは，ティムールの長子のミラン・シャーの命により破壊されてしまったのである。」［クラヴィホ，143-5 ; cf. Blair 2000, 49 ; Melville 1981, 170 ; Minorsky, 44 ; Mashkur, 595 ; Wing, 81］

イル・ハーン朝ではガザンのイスラームへの改宗によって宗教建築の建造が増えるが，そもそも宮殿や邸宅などが建設されることはほとんどなかった［Wilber 1955, 32, 100-4 ; 羽田 1994, 159］。支配者が政務を司り，居住する建造物としてダウラトハーナを都市内部に建設するようになったのは，恐らくイル・ハーン朝滅亡後のことで，2万の部屋は誇張としても，スルタン・ウワイスによる豪華なダウラトハーナ建設は，遊牧系支配者層の都市に対する考え方が徐々に変化し，タブリーズが政治的な拠点としての重要性を増した［Werner 2013, 13-4 ; Wing, 79 ; Zakerwski, 45-7］ことに起因するものといえよう[27]また，クラヴィホの「多くの建築物が表入口を広場の方に向け」ていたという記述も注目に値する。上述したように，王朝の支配者層に限らず，有力者が自身の権力や富を示すために広場から見えるように各種建造物を建てる傾向が常態となっていたことを，この記述は明らかにする。

トルコ・モンゴル系遊牧王朝の支配者層の都市重視への意識変化や建設活動は，ジャラーイル朝時代の芸術文化にも反映された［cf. Blair 2014 ; 346］。スルタン・ウワイスに仕えた宮廷詩人サルマーン・サーワジー（1376 没）は，スルタン・ウワイスのタブリーズ入城を預言者ムハンマドのメッカ入城に模して讃える頌詞で，「タブリーズの町はスルタン・ウワイス軍の行進によって，預言者によるカアバの地のごとく清らかにあらわれ／そよ風はこの吉報をつねに牧草地に飾り，頂の木々は地上に感謝をおき／薔薇はダウラトハーナの食布に百の花弁を散らし，ナイチンゲールはミフラーン・ルードの川面に百のさえずりを響かせる」［Sāwajī, 139］」と，ダウラトハーナを詩に詠み込みこんでいる[28]。ノウルーズの到来を

27） 第8代イル・ハーンのウルジャイトゥ（在位 1304-1316）は，自身の墓廟を核とするスルターニーヤにディーワーンハーナ（dīwān-khāna）をともなう宮殿に相当する建物（imārat）を建設したが，この建物はダウラトハーナとは呼ばれていない［*ZJT*, 68 ; cf. Blair 1986, 146］。

28） サーワジーについては，詳しくは Wing, 136-43 を参照。

祝う抒情詩でもダウラトハーナは登場し，またダウラトハーナの広場（maidān-i daulatkhāna）という表現もみられる［Sāwajī, 386, 404］。サルマーン・サーヴァジーの作品には具体的な描写は少ないが，ダウラトハーナがジャラーイル朝にとって王権を象徴する重要な建築物であったことをうかがわせる。スルタン・ウワイスの息子のスルタン・アフマドの時代は写本絵画が洗練され，ペルシア写本絵画の古典期とされる。現存する絵画作品は少ないが，繊細な装飾や書体とともに，庭園や複層の宮殿やその内装が重要な対象として描かれ始めるようになったのものジャラーイル朝時代のことで，それはパトロンとなった支配者の知る世界，すなわち当時の建築や生活文化がある程度あらわされている[29]。クラヴィホの記述からは，スルタン・ウワイスのダウラトハーナが庭園の中に建設されたものだったかどうかは確認できない。しかし，スルタン・ウワイスのダウラトハーナがタブリーズの郊外に建設されたこと，絵画作品に描かれた庭園や宮殿やサーヴァジーの詩の描写からも，スルタン・ウワイスのダウラトハーナと庭園は無縁とは思われない。広場に面する庭園内に豪華な邸宅を建てることは，すでにジャラーイル朝時代に一種の王権誇示の手段となっていたのであろう。

ティムール朝下のサマルカンドやヘラートでは内部に宮殿をもつ庭園が好んで造園されているが［cf. クラヴィホ, 203-8 ; バーブル, 86-7］，ティムール朝の庭園の構造は，ガザンがウジャンに造営したチャハール・バーグ様式の庭園に代表される，イル・ハーン朝の庭園を継承したものと考えられている［Pinder-Wilson, 76-7 ; O'Kane 1997, 590-1］。西アジア遠征から帰還した 1404 年，ティムールはこれらの庭園や内部のパビリオンの建設に着手した［O'Kane 1993 ; 253］。ティムールが西アジア遠征の際に，サマルカンドを首都に相応しく整備するために職人や学者を連れ帰ったことはよく知られている。そのなかで画家たちは，ティムール朝の写本芸術の発展に貢献し［cf. Brend 2003, 38 ; Çağman & Tanınzı, 228 ; Sims, 262］，さらには宮殿の壁画装飾に携わった［cf. Wilber 1979, 128-9］。庭園に関していえば，もっとも遅い 1404 年造園のナウ庭園（Bāgh-i Nau）にシリアやエジプトから連れてこられた建築家が携わったことが伝えられているが［Golombek 1995, 138-40］，芸術家だけでなく，サマルカンドに移住したジャラーイル朝の造園家がサマルカンドの庭園の設計に影響を与えたであろうことは想像に難くない。中央アジアでもイラン高原とほぼ同時期に支配者による都市内部への宮殿建設活動が観察されるようになるが，管見の限り宮殿がダウラトハーナと呼ばれることはなかった[30]。支配者の滞在地として都市内部および郊外に造園されたティ

29）Cf. Brend 1991, 141 ; O'Kane 1993, 252 ; Çağman & Tanınzı, 233。現存するジャラーイル朝時代の写本絵画は少ないが，その代表作を収める Khwājū Kirmānī の詩集（Add MS 18113）は所蔵している大英図書館 HP のデジタルライブラリーで閲覧できる（http : //www.bl.uk/manuscripts/Viewer.aspx?ref=add_ms_18113）。3v, 12r, 18v, 45v, 91r の写本絵画に壁に囲まれた庭園，宮殿，もしくは庭園内の宮殿が描かれている。

30）中央アジアではチャガタイ・ハーン国時代末期の 14 世紀前半から宮殿（saray または qaṣr）が建設され，ティムールもサマルカンドに青の宮殿，故郷キシュに白の宮殿を建設し，折りにふれ↗

ムール朝の庭園が広場に面して建設されることもなかった［cf. 羽田 1987, 194］。熱心な都市建設活動で知られるティムールだが，公的な行事を通じて自らの王権をサマルカンド住民に誇示するために整備したのは，クリルタイなどの行事のときにパレードが行われる，市壁からディルゴシャー庭園（Bāgh-i Dilgushā）に至る大通りで[31]，広場のように定まった公空間は設置されなかった。王権を都市住民にひろく可視化することを強く意識した，壮麗な王宮庭園と広場が組合わさった公空間としての「広場－王宮」構造は，ポスト・モンゴル時代に限っていえば，主にペルシア語文化圏の西部限定で広まった建築文化だったようである。

2.「広場－王宮」構造の源流に関する考察

タブリーズの王宮地区における「広場－王宮」構造の発展にジャラーイル朝の支配者が大きな貢献を果たしたことに間違いないが，彼らがダウラトハーナを建設するようになった理由は何か，起源はどこまで遡ることが可能なのか，ジャラーイル朝以前にダウラトハーナに類する王宮を建てた支配者はいなかったのか，多くの疑問が残される。

先述のキプチャク・ハーン，ジャーニー・ベクがタブリーズに侵攻したときに，彼は同地のダウラトハーナに滞在したとの短い記述がある［*ZJT*, 235-6 ; *Maṭla'*, I-1, 315（292）; *Lubb*, 183 ; Bidlīsī, II, 52. cf. *Rauḍat*, II, 635］。このすぐ後でスルタン・ウワイスがジャーニー・ベクを破ってタブリーズを占領するが，この記述に従えば，ジャラーイル朝よりも前のチョパン朝の時代に，タブリーズ市内ですでにダウラトハーナが建設されていたということになる。先述のサーワジーの頌詞もスルタン・ウワイスのタブリーズ入城以前からのダウラトハーナの存在が前提といえるだろう[32]。

そもそも王宮も庭園も王権を象徴する普遍的な施設である。古代ペルシアの時代からイラン高原では宮殿と庭園は不可分な関係にあった［Pider-Wilson, 71-2 ; Fakour, 297-8］。ガズナ朝やセルジューク朝などのモンゴル以前のイラン高原の遊牧系イスラーム諸王朝も内部に王宮をもつ庭園を建設し，そのいくつかは広場と接していた［cf. Pinder-Wilson, 75-6 ;

↘ 宮殿にも滞在している。ただし，サマルカンドで滞在場所となったのは庭園内に建設された宮殿（qaṣr または kūshk）で，国事を挙行するための青の宮殿に滞在することはなかった［川口，8-14, 2-0-2, 25］。白の宮殿は庭園内にあった［クラヴィホ，187-9］。巨大な門の遺構のみが現存する。ヘラートでは，サファヴィー朝のタフマースブ時代に，亡命してきたムガル朝第 2 代フマーユーン（在位 1530-38, 1555-56）を迎えるにあたってショマール庭園に面して広場が建設されたことが記されている［Cf. Szuppe 1992, 155-6 ; Noelle-Karimi 2014, 58］。

31） クラヴィホ，246-8 ; O'Kane 1993, 253-4. O'Kane は王権を誇示する場としての大通りの機能を説明するにあたってオスマン朝の例を挙げているが，タブリーズやカズウィーンなどサファヴィー朝の王宮地区にも大通り（khiyābān）が存在し，Alemi も Alemi 2007 などでその重要性を指摘している。なお，タブリーズには現在でも khiyābān が地区名として残っている。

32） ファールス地方の地誌 *Shīrāz-nāma* には，1271 年に行われたイル・ハーン朝のキーシュ島遠征の記事にキーシュのダウラトハーナ（daulat-khāna-yi Kīsh）という表現が見られる［*Shīrāz-nāma*, 65］。管見の限り，モンゴル時代に遡る最も古い用例であるが，*Shīrāz-nāma* は 14 世紀に書かれたものなので，どこまで正確に 13 世紀の表現を反映しているかは不明である。

Golombek 2000, 299 ; Gharipour, 105]。アッバース朝（750–1258）やその建築様式の影響を受けたトゥールーン朝（868–905）のフスタートにも建設事例がある［Necipoğlu, 9–10 ; Golombek 2000, 298］。カスピ海南岸タバリスターン地方のバーワンド朝の Ḥusām al-Daula Ardashīr（在位 1172–1206）は，各地に庭園や広場を建築している。Golombek はこれをイスラーム以前からの伝統がイラン辺境で生き残ったものと分析する一方，モンゴルやティムールはイスラーム以前の都市の庭園文化をテントなどの遊牧民の生活様式に適合させたと考える［Golombek 1995, 141–2, 145 ; Golombek 2000, 300］。Alemi や Babaie のように広場と宮殿の複合構造をイスラーム以前のペルシアの伝統とみなし，モンゴル支配によって一旦途切れたようにみえる，かつての古代ペルシア領域における建築上の伝統が，遊牧系王朝の都市文化への傾倒とともに「復活」した［Babaie 2003, 41］とみなすことも可能であろう。

ジャラーイル朝はタブリーズ占領以前，バグダードを本拠地とし，タブリーズ占領後もタブリーズとバグダードを軸とする移動を続けた［cf. Werner, 2］。イラクはイスラーム以前の古代ペルシアの諸王朝が政治の中心地とした地域である。そのイラクにあってアッバース朝の首都バグダードはモンゴル時代に入ってからも引き続き当時有数の都市であり続けた。上述した庭園や宮殿が描かれたジャラーイル朝の写本絵画作品のいくつかはバグダードで製作されたと推測されている［cf. Brend 2003, 38 ; Brend 2010, 18 ; O'Kane 2019, 219 ; Wing, 19, 186］。バグダード滞在中にジャラーイル朝の支配者がどこに居住していたかや，バグダードにおける日常の活動についてはほとんど不明であるが，彼らが写本絵画に描かれているような，バグダート滞在中に経験した都市の生活様式をタブリーズに持ち込み，バグダードと同様の環境を再現しようとしたとしても不思議ではない。庭園に天幕を張って居住する遊牧的な生活スタイルからダウラトハーナという建築物の内部に居住するという都市型の生活スタイルへの転換がジャラーイル朝よりも前の時代に遡る可能性は高いが，単なる居住施設としての機能に限定されない，王権表象の場としての壮麗なダウラトハーナの建設や広場と王宮庭園が結びついた王宮地区の整備は，ジャラーイル朝のタブリーズ占領を契機として進展したことは間違いないだろう。

3.「広場－宗教施設」構造の源流に関する考察

広場もイスラーム以前からイラン高原を中心とする地域で普遍的な公空間として存在した［cf. Babaie 2015, 200］。もともとメイダーンという言葉は馬場を意味し，競馬やポロ競技が行われる場だった。第 2 章で明らかにしたように，タブリーズではイル・ハーン朝時代から広場に面して宗教施設が建設されるようになっていたが，宗教施設が広場に面して建設される例は，モンゴル時代以前にすでに確認される。イスファハーンの旧広場はふたつの町の合併によって町の周縁部から中心部に位置するようになり，8 世紀に金曜モスクが建設され，11 世紀のセルジューク朝時代までに競技場としての役割だけでなく，宗教・行政センター，市場としての役割を獲得していた［Gaube, 76–8 ; 羽田 1987, 187 ; Alemi 1991, 100］。これに

ついて羽田は，旧広場が本来の広場の機能とは異なった性格をもったとしている。

タブリーズの「広場－宗教施設」構造の事例を，「広場－王宮」構造のようにモンゴル時代の中断後の復活とみるべきか，新たな建築様式の登場とみるべきかについては，比較事例が少ないため判断が難しい[33]。ただ，イル・ハーン朝のイスラーム化以後に建設された宗教建築で，現存するアリー・シャー・モスクやブルー・モスクなどはいずれも壮麗なもので，宗教施設を建てることで建設者の威光や信仰心を示す意図があったことは明らかである。宗教施設を見晴らしのよい公空間である広場に面して建設すれば，その威容はいや増したはずである[34]。クラヴィホのいう「表入口を広場の方に向け」ていた多くの建築物には宗教施設も含まれていたことであろう。

宗教施設についていえば，これを広場に面して建設することには宗教実践上の目的があった可能性もある。アナトリアのテッケ（特にベクタシュ教団）にとって広場は宗教儀礼を行う空間として重要だったという。アルダビールのサフィー廟にも 14 世紀末にサマーのための広場が隣接していた［Rizvi 2011, 37, 81］[35]。「広場－宗教施設」構造における公空間としての広場の宗教上の機能については，イル・ハーン朝の領域や時代を越えて，今後広く検討していく必要があると思われる。

外国使節の謁見会場として使用されるなど，見せることを意識して建設された王宮庭園と宗教施設は，個別に広場と結びつき，アク・コユンル朝時代に広場を結節点として同じ公空間を構成するようになった。これはサファヴィー朝時代の王宮地区に継承される，アク・コユンル朝時代に生じた大きな変化といえよう。そして宗教施設の建設は，政治的拠点と宗教的拠点だけでなく，市場という経済的拠点を構成要素として伴うものでもあった。ただし，カイサーリーヤを付設する総合的な公空間としての本格的な発展が史料で確認できるのは，第 1 章でみたようにサファヴィー朝時代に入ってからのことであろう[36]。また，羽田は「墓廟都市」とサファヴィー朝の都市計画の相違として建設者の墓がないことを指摘したが，墓付きの宗教施設にかわる宗教施設としてサファヴィー朝のもとでは広場に面して王のモスク（masjid-i shāh）が建設された。しかし，タブリーズ，カズウィーン，イスファハーンのい

33）15 世紀の事例を挙げると，シャラフ・アッディーン・ビトリスィーは，810/1407-8 年に，故郷ビトリスの Amīr Shams al-Dīn が Kūk Maidān に面して宗教施設 Shamsīya を建設したことを伝えている［Bidlīsī, I, 380. cf. Sinclair, 302］。イスマーイール 1 世がアク・コユンル朝に対して決起する前に亡命生活を送っていたギーラーンのキヤー政権の首都ラーヒージャーンには，ラーヒージャーン広場（Maidān-i Lāhijān）に面して Kiyā Farīdūn のモスクとマドラサが建っていた［Hayātī, 214］。ティムール朝時代のサマルカンドでは，1417 年に第 4 代ウルグ・ベク（在位 1447-9）がマドラサをはじめとする宗教施設群をレギスタン広場に面して建設している。

34）Blair はアリー・シャー・モスクのイーワーン構造がクテシフォンを模倣したものであり，また宗教施設としてのイル・ハーン朝期の建築のモデルとなったとする［Blair 2014, 333-5］。

35）広場で行われる宗教儀礼の様子は写本絵画からも確認できる（例えば，994/1586 年にカズウィーンで製作された大英図書館所蔵の『王書』Add. 27302, 621v）。

36）カズウィーンの広場と市場の整備については，後藤 2018, 62-54 を参照のこと。

ずれの事例でも，モスクの建設は王宮庭園が建設された後のことで，あくまでも王宮庭園の建設が主目的であったことは留意しなければならない。

カスピ海南岸ギーラーンの地方王朝のキヤー政権が 820/1418 年以降，初期の拠点としたラーニクーを整備した際には，金曜モスクに接して大きな広場が建設され，広場の東に市場，南に宮殿（qaṣr）とハレムが建設されている［*TGD,* 144］。カスピ海南岸地方は，第 2 節で紹介した Golombek が指摘するように，イラン高原を支配した諸王朝の直接支配を受けず，イスラーム以前のペルシアの伝統とともに異なった文化や習慣を保持した辺境地域である。このような地域にアク・コユンル朝がサーヒブアーバードを完成させた 15 世紀後半よりも前の 15 世紀前半に「宮殿－広場－宗教複合施設」構造の王宮地区が建設されていたことは非常に興味深い。「広場－宮殿」構造と「広場－宗教複合建築」構造が一体化するまでの経緯を解明するだけでなく，モンゴル時代以前からのペルシア語文化圏の建築文化の継承について考える上で，諸地方の事例の収集・分析が重要であることを示唆していよう[37]。

お　わ　り　に

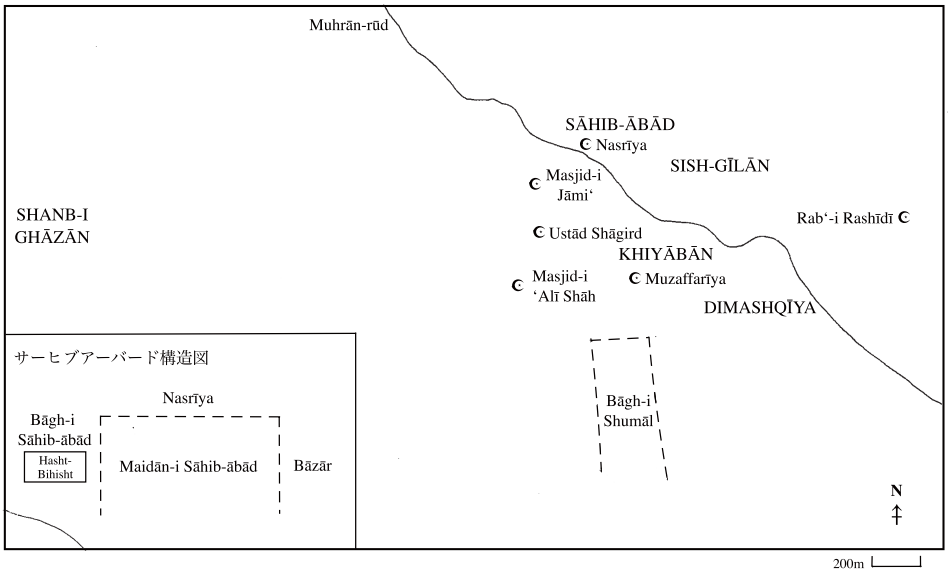
本稿では，サファヴィー朝の最初の「首都」タブリーズの王宮地区サーヒブアーバードの成立と発展の歴史をイル・ハーン朝滅亡後からの支配者の建設活動の変遷からたどっていった。従来の研究では王宮庭園と広場，もしくは墓廟を核とする宗教施設に別々に焦点をあてて議論がされてきた。これに対して本稿では，まずサーヒブアーバードは王宮庭園，広場，宗教複合施設の 3 つの要素から構成されることを明確にし，その統合の過程を重視すべきことを提唱した。ポスト・モンゴル時代には遊牧系の支配者は庭園を滞在場所とする遊牧的な心性や習慣を維持しつつも，都市の生活様式への順応とともに都市における政治の拠点，王権の象徴としての壮麗なダウラトハーナの建設を開始した。王宮庭園の建設には，その壮麗さを演出する公空間としての広場が初期段階（史料から確認できるのはジャラーイル朝時代）から組み合わされていた。このような遊牧系支配者の都市建設のひとつとしてカラ・コユンル朝ジャハーン・シャーの王宮地区サーヒブアーバードが建設された。これとは別途，宗教複合施設が広場に面して建設される流れがあり，アク・コユンル朝のウズン・ハサン時代末期からスルタン・ヤアクーブ時代にかけての政治的な安定を背景に，「広場－王宮」構造に「広場－宗教施設」構造が併わされて「王宮－広場－宗教施設」構造が誕生し，王権を表象する公空間としての王宮広場の整備が進んだ。支配者が庭園や広場を重視する姿勢にモンゴル時代との連続性を見ることは可能であるが，庭園や広場はペルシア語文化圏に普遍的にみられる建築要素であり，庭園に限って言えば，それはモンゴル時代の新たな変化という

37）　O'Kane 2019 は美術史の観点からポスト・モンゴル時代の地方王朝下の建築や写本絵画を列挙，概観している。

よりは，伝統的に存在した庭園文化が新参のトルコ・モンゴル系王朝の支配者に受け入れられ，幕営地や墓廟などの新たな機能が付け加えられたとみるのがより適切と思われる。

ポスト・モンゴル時代の諸王朝のダウラトハーナ建設，そして広場を結節点として王宮庭園と宗教施設から構成される王宮地区の建設の背景には，イル・ハーン朝末期から徐々に強まっていったトルコ・モンゴル系遊牧王朝の支配者の都市重視の姿勢があった。イスラームを受容して久しい遊牧系の支配者は，都市を支配の拠点とし，都市文化への嗜好を強めていった。都市文化を表象する建築や芸術作品は王権を誇示する効果的な媒体として認知され，美しいタイルや壁画で飾った壮麗なダウラトハーナや宗教施設が見晴らしのきく広場に面して建設された。公空間としての王宮地区を舞台として諸行事が開催され，市場という経済施設も整備されていった。タブリーズを占領したサファヴィー朝の「首都」における王宮地区の建設は，この流れを継承，発展させたものといえよう。

本研究はアジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「イスラーム聖者廟の財産管理に関する史料学的研究：イラン・サファヴィー朝祖廟を事例として」の成果の一部です。



地図　15-16 世紀のタブリーズと宗教施設（Google Maps をもとに作成）

参考文献

（略号）

Amīnī: *Tārīkh-i ‘ālam-ārā-yi Amīnī*

AT: *Aḥsan al-tawārīkh*

Bidlīsī : *Sharaf-nāma*

DB : *Kitāb-i Diyārbakriyya*

Faṣīḥ : *Mujmal-i Faṣīḥī*

Futūḥāt : *Futūḥāt-i Shāhī*

Hayātī : *A Chronicle of the Early Safavids and the Reign of Shah Ismā'īl*

HS : *Tārīkh-i ḥabīb al-siyar*

Jawāhir : *Jawāhir al-akhbār*

JT : *Jāmi' al-tawārīkh*

KhT : *Khulāṣat al-tawārīkh*

Lubb : *Lubb al-tawārīkh*

Maṭla' : *Maṭla'-i sa'dain wa majmal-i baḥrain*

Nuzhat : *Nuzhat al-qulūb*

Rauḍat : *Rauḍāt al-jinān wa jannāt al-jandān*

RS : *Rauḍat al-Ṣafā*

Sāwajī : *Dīwān-i Salmān Sāwajī*

TAA : *Tārīkh-i 'ālam-ārā-yi 'Abbāsī*

Takmilat : *Takmilat al-akhbār*

TGD : *Tārīkh-i Gīlān wa Dailamistān*

Uwais : *Tawārīkh-i Shaikh Uwais*

ZJT : *Dhail-i Jāmi' al-tawārīkh*

ZTG : *Dhail-i tarīkh-i guzīda*

（ペルシア語ほか現地語史料）

'Abdī Beg Shīrāzī（1369）. *Takmilat al-akhbār*, ed. 'A. Nawā'ī, Tehran.

'Abī Bakr Quṭbī Aharī（2010）. *Tawārīkh-i Shaikh Uwais*（*Jadīda*）. I. Afshār（ed.）, Tehran.

Abū Bakr-i Ṭihrānī（1993）. *Kitāb-i Diyārbakriyya : Ak-koyunlular Tarihi*, 2 vols., F. Sümer（ed.）, Ankara.

Amīr Ṣadr al-Dīn Ibrāhīm Amīnī Harawī（2004）. *Futūḥāt-i Shāhī : Tārīkh-i Ṣafawī az āghāz tā sāl-i 920 H. Q.*, M. R. Naṣīrī（ed.）, Anjoman-i āthār wa mafākhir-i farhangī, Tehran.

Būdāq Munshī Qazwīnī（2000）. *Jawāhir al-akhbār : Bakhsh-i tārīkh-i Īrān az Qarā Qūyunlū tā sāl-i 984 H.Q.,* M. Bahrām-nizhād（ed.）Tehran.

Faḍlullāh b. Rūzbihān Khunjī-Iṣfahānī（1992）. *Tārīkh-i 'ālam-ārā-yi Amīnī,* John E. Woods（ed.）, Royal Asiatic Society, London.

Faṣīḥ Khwāfī（1239）. *Mujmal-i Faṣīḥī*, vol. 3. M. Farrukh（ed.）, Mashhad.

Ḥāfiẓ Abrū（1317）. *Dhail-i Jāmi' al-tawārīkh-i Rashīdī*, Kh. Bayānī（ed.）, Tehran.

Ḥāfiẓ Ḥusain Karbalā'ī Tabrīzī（1965-70）. *Rauḍāt al-jinān wa jannāt al-jandān*, J. Sulṭān-al-Qurrā'ī（ed.）, 2 vols., Tehran.

Ḥamd Allāh Mustaufī（1372）. *Dhail-i tārīkh-i guzīda*, Ī. Afshār（ed.）, Tehran.

Ḥamd Allāh Mustaufī（1915）. *Nuzhat al-qulūb*, G. Le Strange（ed.）, Brill, Leiden.

Ḥasan Beg Rūmlū（1357）. *Aḥsan al-tawārīkh*, ʻA. Nawāʼī（ed.）, Tehran.

Iskandar Beg Turkmān Munshī（1350）. *Tārīkh-i ʻālam-ārā-yi ʻAbbāsī,* 2 vols., I. Afšār（ed.）, Tehran.

Kamāl al-Dīn ʻAbd al-Razzāq Samarqandī（1372）. *Maṭlaʻ-i saʻdain wa majmal-i baḥrain*, vol. 1-1. ʻA. Nawāʼī（ed.）, Tehran.

Kamāl al-Dīn ʻAbd al-Razzāq Samarqandī（2004）. *Maṭlaʻ-i saʻdain wa majmal-i baḥrain*, vol. 1-2, 2-1 & 2-2. ʻA. Nawāʼī（ed.）, Tehran.

Khwāndamīr（1333）. *Tārīkh-i ḥabīb al-siyar fī aḫbar afrād al-bashar*, 4 vols., J. Humāʼī（ed.）, Tehran.

Mīr Khwānd（1960）. *Tārīkh-i Rauḍat al-Ṣafā*, V, Tehran.

Muʻīn al-Dīn Zarkūb Shīrāzī（1310）. *Shīrāz-nāma*, B. Karīmī（ed.）, Tehran.

Naṣūḥü's-Silāḥī Maṭrāḳçī（1976）. *Beyān-ı Menāzil-i Sefer-i ʻIrāḳeyn-i Sulṭān Süleymān Ḫān*, H. G. Yurdaydın（ed.）, Türk Tarih Kumuru Basımevi, Ankara.

Qāsim Beg Ḥayātī Tabrīzī（2018）. *A Chronicle of the Early Safavids and the Reign of Shah Ismāʻīl (907-930/1501-1524)*, K. Ghereghlou（ed.）, American Oriental Society, New Haven.

Qāżī Aḥmad Qumī（1980）, *Khulāṣat al-tawārīkh*, E. Ešrāqī（ed.）, 2 vols., Tehran, 1980-83.

Rashīd al-Dīn（1957）. *Jāmiʻ al-tawārīkh*, III, A. Alizade（ed.）, Baku.

Salmān Sāwajī（1371）. *Dīwān-i Salmān Sāwajī*, A. Ḥālat（ed.）, Muwasisi-yi Farhangī-yi Hunarī-yi Mā.

Sharaf Khān Bidlīsī（1860）. *Sharaf-nāma*, I, V. Véliaminof-Zernov（ed.）, St, Petersburg.

Yaḥyā b. ʻAbd al-Laṭīf al-Ḥusainī al-Qazwīnī（1314）. *Lubb al-tawārīkh*, M. H. Muḥaddith（ed.）, Anjoman-i āthār wa mafākhir-i farhangī, Tehran.

Ẓahīr al-Dīn Marʻshī（1347）. *Tārīkh-i Gīlān wa Dailamistān*. M. Sutūda（ed.）, Intishārāt-i Buniyād-i Farhang-i Īrān, Tehran.

（欧文および和訳史料）

Barbaro. *Travels to Tana and Persia. A narrative of Italian travels in Persia*, C. Grey（tr.）, Hakluyt Society（repr. New York）, 49, London.

Ghistele, Joos van（1998）. *Tvoyage van Mher Joos van Ghistele*, R. J. G. A. A. Gaspar（ed.）, Verloren, Hilversum.

Membré, Michaele（1999）. *Mission to the Load Sophy of Persia*（1539-1542）, A. H. Morton（tr. & ed.）, London.

Romano, Domenico（A Venetian merchant）（1873）. "Travels of a Merchant in Persia", in *Travels to Tana and Persia. A narrative of Italian travels in Persia*, C. Grey（tr.）, Hakluyt Society（repr. New York）, 49, London, 141-207.

イブン・バットゥータ（家島彦一訳注）(1998)『大旅行記』3，平凡社，東京

バーブル（間野英二訳）（1998）『バーブル・ナーマの研究』3（訳註），松香堂，京都

クラヴィホ（山田信夫訳）（1979）『チムール帝国紀行』，桃源社，東京

（研究）

Alemi, Mahvash（1991）. “Urban Spaces as the scene for the ceremonies and pastimes of the Safavid court”, *Enviromental Design : Journal of the Islamic Environmental Design Research Centre* i, 98–107.

Alemi, Mahvash（1995）. “Die königlichen Gärten von Aschraf und Farahabad”, in A. Petruccioli（ed.）, *Der islamische Garten : Architektur–Natur–Landschaft*, Deutsche Verlags–Anstalt, Stuttgart, 201–216.

Alemi, Mahvash（1997）. “The Royal Gardens of the Safavid Period : Types and Models”, in A. Petruccioli（ed.）, *Gardens in the Time of the Great Muslim Empires : Theory and Design*, suppl. to *Muqarnas* 7, Leiden, 72–96.

Alemi, Mahvash（2005）. “Safavid Royal Gardens and Their Urban Relationships”, in *Survey of Persian Art* 18, 1–24.

Alemi, Mahvash（2007）. “Princely Safavid Gardens : Stage for Rituals of Imperial Display and Political legitimacy,” in M. Conan（ed.）, *Middle East Garden Traditions : Unity and Diversity*, Dumbarton Oaks Research Library and Collection, Washington D. C., 113–137.

Alemi, Mahvash（2013）. “The garden city of Shah Tahmasb reflected in the words of his poet and painter”, in Stephen Bann（ed.）, *The Interlacing of Words and Things in Gardens and Landscapes* : Dumbarton Oaks Symposium 2009, Dumbarton Oaks Colloquium Series in the History of Landscape Architecture XXXIII, Washington D. C., 95–114.

Asl, Lida Balilan（2016）. “The spatial structure of Tabriz in Safavid era in comparison with itineraries and pictorial documents”, *Bagh–e Nazar* 13 : 38, 45–56.

Asl, Lida Balilan（2019）. “The physical structure of Tabriz in Shah Tahmasp Safavid’s era based on Matraici Miniature”, *METU Journal of the Faculty of Architecture* 36 : 2, 165–194.

Aube, Sandra（2016）. “The Uzun Hasan Mosque in Tabriz : New Perspectives on a Tabrizi Ceramic Tile Workshop”, *Muqarnas* 33, 33–62.

Babaie, Sussan（2003）. “Building on the Past : the Shaping of Safavid Architecture, 1501–76”, in J. Thompson and Sh. R. Canby（eds.）, *Hunt for Paradise : Court Arts of Safavid Iran 1501–1576*, Skira, Milano, 27–47.

Babaie, Sussan（2008）. *Isfahan and its Palaces : Statecraft, Shi‘ism and the Architecture of Conviviality in Early Modern Iran*, Edinburgh University Press, Edinburgh.

Babaie, Sussan（2015）. “Sacred Sites of Kingship ; The Maydan and Mapping the Spatial–Spiritual Visual of the Empire in Safavid Iran”, in J. Thompson and Sh. R. Canby（eds.）, *Persian Kingship and Architecture : Strategies of Power in Iran from the Achaemenids to the Pahlavis*, Tauris, London, 175–218.

Bakhtiyar, Ali Asghar（2011）. “Reminiscences of the Maidan–i Shah”, in Colin P. Mitchell（ed.）, *New Perspectives on Safavid Iran : Empire and Society*, Routledge, London & New York, 150–162.

Bayānī, Shīrīn（1962）, *Tārīkh–i Āl–i Jalāyir*, Intishārāt–i Dānishgāh–i Tihrān, Tehran.

Bernardini, Michele（2003）. “Hašt Bihišt”, *EIr*, XII, 49–51.

Blair, Sheila S.（1986）. “The Mongol Capital of Sulṭāniyya, ‘the Imperial’”, *Iran* 24, 139–52.

Blair, Sheila S.（2000）. “Tabriz : 2. Architecture”, *EI*^{2}, X, 49–50.

Blair, Sheila S.（2014）. “Tabriz : International Entrepôt under the Mongols”, in Judith Pfeiffer（ed.）, *Politics, Patronage and the Transmission of Knowledge in 13*th–15th *Century Tabriz*, Brill, Leiden–Boston, 321–356.

Blair, Sheila S.（2016）. “Rab‘e Rašidi”, *EIr*（online）.

Blake, P. Stephen（2003）. “Shah ‘Abbās and the Transfer of the Safavid Capital from Qazvin to Isfahan”, in A. J. Newman（ed.）, *Society and Culture in the early Modern Middle East : Studies on Iran in the Safavid Period*, Brill, Leiden–Boston, 145–164.

Brend（1991）, *Islamic Art*, British Museum Press, London

Brend（2003）, *Perspective on Persian Painting : Illustrations to Amir Khusrau’s Khamsah*, Routledge, London & New York.

Brend（2010）, *Muhammad Juki’s Shahnamah of Firdausi*, Royal Asiatic Society, London.

Çağman Filiz & Tanınzı Zeren（2011）. “Selections from Jalayirid Books in the Libraries of Istanbul”, *Muqarnas* 28, 221–264.

Fakour, Mehrdad（2000）. “Garden i : Archaemenid Period”, *EIr*, X/3, 297–298.

Gaube, Heinz（1979）. *Iranian Cities*, New York University Press, New York.

Gharipour, Mohammad（2013）, *Persian Gardens and Pavillions : Reflections in History, Poetry and the Arts*, Tauris, London & N. Y.

Golombek, Lisa & Wilber, Donald（eds.）（1988）. *The Timurid Architecture of Iran and Turan*, 2 vols., Princeton University Press, Princeton & New Jersey.

Golombek, Lisa（1995）. “The Gardens of Timur : New Perspectives”, *Muqarnas* 12, 137–147.

Golombek, Lisa（2000）. “Garden ii : Islamic Period”, *EIr*, X/3, 298–305.

Gronke, Monika（1992）. “The Persian Court between Palace and Tent : From Timur to ‘Abbas I.” in L. Golombek & M. Subtelny（eds.）, *Timurid Art and Culture : Iran and Central Asia in the Fifteenth Century*, 18–22, Leiden & N. Y. & Köln, Brill.

Jahn, Karl（1968）. “Täbris : ein mittelalterliches Kulturzentrum zwischen Ost und West”, *Sonderabdruck aus dem Anzeiger der phil, -hist, Klasse der Österreichischen Akademie der Wissenschaften*, So. 11, 201–212.

Kārang, ‘Abd al-‘Alī（1972）. *Āthār-i bāstānī-i Āẕarbā’ijān. Jild-i awwal : Āthār wa abniyā-yi tārīkhī-yi shahristān-i Tabrīz*, Tehran.

Lambton, Ann K. S.（1993）. “Naḳḳāra-khāna”, *EI*^{2}, VII, 927–9.

Mashkūr, Jawād Muḥammad（1973）. *Tārīkhī-i Tabrīz tā pāyān-i qarn-i nuhm-i hijrī*, Tehran.

Mazzaoui, Michel M.（1975）. “From Tabriz to Qazvin to Isfahan : Three phases of Safavid history”, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*, suppl. 3/i, 514–522.

Melville, Charles（1981）. “Historical Monuments and Earthquakes in Tabriz”, *Iran* 19, 159–177.

Melville, Charles（2016）. “New Light on Shah ‘Abbas and the construction of Isfahan”, *Muqarnas* 33, 155–176.

Minorsky, Vladimir（2000）, “Tabrīz : 1. Geography and history”, *EI*[2], X, 41–49.

Necipoğlu, Gülru（1993）. “An Outline of Shifting Paradigms in the Palatial Architecture of the Pre-Modern Islamic World”, *AOr* 23, 3–24.

Newman, Andrew J.（2006）. *Safavid Iran : Rebirth of a Persian Empire*, Tauris, London & N. Y.

Noelle-Karimi, Christine（2011）. *The Pearl in its Midst : Heart and the Mapping of Khurasan (15th – 19th Centuries)*, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Wien.

O’Kane, Bernard（1993）. “From Tents to Pavillions : Royal Mobility and Persian Palace Design”, *AOr* 23, 249–268.

O’Kane, Bernard（1997）. “Architecture and Court Cultures of the Fourteenth Century” in F. B. Flood et al（eds.）, *A Companion to the Islamic Art and Architecture*, II, Wiley & Sons, New York, 585–615.

O’Kane, Bernard（2019）. “Architecture in the Interregnum : The Muzaffarid, Jalayrid and Kartid Contributions”, in S. Babaie（ed.）, *Iran after the Mongols*（The Idea of Iran Book 8）, Tauris, London.

Ökten, Ertuğrul（2014）. “Imperial Aqquyunlu Construction of Religious Establishments in the Late Fifteenth Century Tabriz”, in Judith Pfeiffer（ed.）, *Politics, Patronage and the Transmission of Knowledge in 13th–15th Century Tabriz*, Brill, Leiden-Boston, 371–385.

Pinder-Wilson, Raolph.（1976）. “The Persian Garden : *Bagh* and *Chahar Bagh*”, in E. B. McDougall & R. Ettinghausen（eds.）, *The Islamic Garden*, Washington, 69–85.

Quiring-Zoche, R.（2011）. “Aq Quyunlū”, *EIr*, II, 163–168.

Rizvi, Kishwar（2010）. “Architecture and the Representation of Kingship during the Reign of the Safavid Shah ‘Abbas I”, in L. Mitchell & Ch. Melville（eds.）, *Every Inch a King : Comparative Studies on King and Kingship in the Ancient and Medieval World*s, Brill, 371–397.

Rizvi, Kishwar（2011）. *The Safavid Dynastic Shrine : Architecture, Religion and Power in Early Modern Iran*, Tauris.

Roemer, Hans R.（1986）. “The Safavid Periods”, in P. Jackson & L. Lockhard（eds.）, *The Cambridge History of Iran 6 : The Timurid and Safavid Periods*, Cambridge University Press, Cambridge.

Sattarzadeh, Dariush & Balilan Asl, Lida（2013）. “Review Drawn Miniature of Tabriz City by Nasuh in 16th century”, *International Journal of Architecture and Urban Development* 3（3）, 75–82.

Savory, Roger（1980）. *Iran under the Safavids*, Cambridge University Press, Cambridge.

Sayyid Ḥusain-zāda, Hudā（1394）, *Tārīkh-i farāmūsh shuda : Īrān dar daura-yi Sulṭān Ya‘qūb Āq Qūyunlū*, Nashr-i tārīkh-i Īrān, Tehran.

Sims, Eleanor（2002）. Peerless Images : Persian Painting and Its Sources, Yale University Press, New Haven & London.

Sinclair, T. A.（1987）. *Eastern Turkey : An Architectural and Archaeological Survey*, 1, The Pindar Press, London.

Szuppe, Maria（1992）. *Entre Timourides, Uzbeks et Safavides : questions d'histoire politique et sociale de Hérat dans la première moitié du XVIe siècle*（Cahier de Studia iranica 12）, Association pour l'avancement des études iraniennes, Paris.

Szuppe, Maria（1996）. "Palais et jardin : le complexe royal des premiers Safavides à Qazvin, milieu XVI－debut XVIIe siècles", *Res Orientales* VIII, 143–177.

Werner, Christoph（2000）. *An Iranian Town in Transition : A Social and Economic History of the Elites of Tabriz, 1747–1848*, Harrassowitz Verlag, Wiesbaden.

Werner, Chiristoph（2003）, "Ein Vaqf für meineTöchter. Ḥātūn Ǧān Bēgum und die Qarā Quyūnlū Stiftungen zur 'Blauen Moschee' in Tabriz", *Der Islam* 80, 94–109.

Werner, Chiristoph, Zakrezewski, Daniel & Tillschneider, Hans-Thomas（2013）. *Die Kuǧuǧī-Stiftungen in Tabrīz : Ein Beitrag zur Geschichte der Ǧalāyiriden*, Reichert, Wiesbaden.

Wilber, Donald N.（1955）. *The Architecture of Islamic Iran : The Il Khānid Period*, Princeton University Press, Princeton.

Wilber, Donald N.（1962）. *Persian Gardens and Garden Pavilions*, Tokyo.

Wilber, Donald N.（1979）. "The Timurid Court : Life in Gardens and Tents", *Iran* 17, 127–133.

Wing, Patrick（2016）. *The Jalayirids : Dynastic State Formation in the Mongol Middle East*, Edinburgh University Press, Edinburth.

Wirth, Eugen（1997）. "Qazvin－Safavidische Stadtplanung und Qadjarischer Bazar", *Archäologische Mitteilungen aus Iran und Turan* 29, 461–504.

Woods, John E.（1999）. *The Aqquyunlu : Clan, Confederation, Empire (Revised and Expanded Edition)*, The University of Utah Press, Salt Lake City.

Zakrzewski, Daniel（2000）. "An Idea of Iran on Mongol Foundations : Territory, Dynasties and Tabriz as Royal City（Seventh/Thirteenth to Ninth/Fifteenth Century）", in Ch. Melville（ed.）, *The Timurid Century (The Idea of Iran, vol. 9)*, Tauris, 45–76.

川口琢司（2013）「ティムールの冬営地と帝国統治・首都圏」『史学雑誌』122(10), 1–38.

後藤裕加子（2004）「サファヴィー朝ムハンマド・フダーバンダ時代の宮廷と儀礼」『西南アジア研究』61, 20–46.

後藤裕加子（2005）「宮廷儀礼としてのノウルーズ ―― 16 世紀後半サファヴィー朝宮廷とムガル宮廷の比較から ――」『人文論究（関西学院大学文学部）』55(2), 94–110.

後藤裕加子（2018）「サファヴィー朝の「統治の都」における王宮地区建設事業 ―― カズウィーンのサアーダトアーバードを事例として」『関西学院史学』45, 80–50.

羽田正（1987）「メイダーンとバーグ：シャー・アッバースの都市計画再考」『橘女子大学研究紀要』14, 179–197.

羽田正（1990）「「牧地都市」と「墓廟都市」：東方イスラーム世界における遊牧政権と都市建設」『東

洋史研究』49(1), 1-29.
羽田正（1996)『シャルダン『イスファハーン誌』研究 ――17 世紀イスラム圏都市の肖像――』東京大学出版会

（関西学院大学文学部）